第五講 パウロの自己紹介（四） 第一章五―七節の研究（二月十三日）

三節、四節は、イエスを人として又神の子として提示するを主眼とした、第五節はこれを受けて「われら彼より恩恵と使徒の職を受く」と記し、次に其理由として「これ其名のために萬國の人々をして信仰の道に従はせんとなり」と記したのである。

「恩恵」とは何を意味するか、原語 χάρις (ハリス) は英語 grace に當り種々の意味を有する語である、しかし神又はキリストの恩恵と云ふ時は、「人に對しての自發的なる、制限せられざる愛」を意味する（グリーンの文法書に據る）、そして第五節の「恩恵」は別に他の語を以て限られてない故廣義に解すべきものである、マイヤーが之を「凡ての神の恩恵」(the entire divine grace) と解したのは、寔に合適であると思ふ、即ち救に與り、罪を赦され、生命に浴し、歡喜と平安を味ひ、永遠の希望を與へらるゝに至りし一切を指すのである、一言にして云へば「救の恩恵」(ゴオデー)と云ふ事も出来る、其如何なるものであるかは屢々涙を以て此事を感謝せし凡ての基督者の知るところである(よし深淺の別はありと云へ)。

先づ一般的の事を記し次に特殊の事に移るはパウロの慣用する筆法である、主より恩恵を受けし點に於て筆者たるパウロも讀者たる羅馬府の信徒も全く同一である、彼は此兩者の共通點を擧げて先づ溫味を讀者に注ぎたる後ち、「使徒の職を受く」と自己の特異點に觸れたのである、自己の權能を記す前に先づ讀者と同列に己れを置くは「イエスキリストの僕、召されし使徒」と第一節に記したると同様である。

「われら彼より。恩恵と使徒の職を受く」と云ふ、「彼より」はキリストである、更に精確に云へばキリストを通してである（原語の *dia* は英語の *through* に當る）、賦與者は神である、仲介者はキリストである、凡ての恩恵は神よりキリストを通して降るのである、これ聖書の教ふる所にして又實驗上の眞理である、近代の信者は言ふ、我等は仲介者を以て神との關係を間接にせらるゝを忌む、人は各自直接にその神に連り得べきものである、人は皆神の子であり神は凡ての人の父である、父子の關係は直接であるべきであると、洵に尤もらしき説である、しかし乍ら事實が雄辨に此事を否定するを如何、それはキリストを除きて神と人との關係を近からしめんとするは、却てそれを遠からしむる道であるからである、人はキリストなくして神と連らんとするも、事實上連り得ない、キリストを間に置きて初めて人は神と結び得るのである、これが心靈上の實驗的事實である、恰も山巔^{【えんてん】}を究むるには登山路を攀^{【よ】}じ登らざるべからざるが如く、電氣は電線を通して初めて電燈を照し得るが如くである、キリストを間に置きて初めて恩恵は彼を通して我等に下る、これ實に生命獲得の道である、古來敬虔有力の信者は悉く此道に據りたるを史に眺めよ、重ねて言ふ我等は理論に據らず事實に據ると。

五節後半は五節前半の理由である、「これ其名のために萬國の人々をして信仰の道に従はせんとし」と云ふ、之を改めて「これ其名のために異邦の萬民をして信仰の服従に入らしめんとす」とする方原意に近い。

「其名のために」即ちキリストの名のためにと云ふ、何故「萬民を救ふために」と言はないのであるか、人類に對する福音宣傳は人類それ自身の救済のためではないか、イエス自身又全人類のために十字架の死さへ受けたではないか、何故にパウロは萬民のためと云はずして、キリストの名のためと云ふたのか……これ如何にも近代

人の出しさうな抗議である、さりながらパウロの心を常に最も強く占領して居たのは世界萬民にあらざずしてキリスト彼自身である、従つて彼の福音宣傳は彼の名のため、彼の聖名の揚がらんためであつた、勿論萬民を思はなかつたのではない、牧者なき迷羊の痛ましき姿は鋭敏なる彼の心を強く動かしたに相違ない、しかし乍ら此痛ましき姿よりも彼聖なる姿がヨリ鮮かに彼の心に映つたのである、先づキリストのため、然る後同胞人類のためである、これ主にある健全なる心の態である、パウロの言は常に意表に出づるが如くにして實は決して意表に出でないのである。

「異邦の萬民をして（凡ての異邦人をして）」とあるはパウロが異邦傳道の使命を受けし使徒なる故である、「信仰の服従に入らしめんため也」とあるは原文「信仰の服従に迄」とあるのみなるを補譯したのである、今や服従といふ語は人の忌み嫌ふものである、さはれ吾人の實驗は信仰の服従のみが人を自由獨立ならしむる事を教ふるのである、人は信仰を以て神に服従して初めて自主の民となり得る、この服従を斥くる者は何か他の空しき人又は力に服従して其奴隷となるの已むなきに至るのである、見よ服従すべき者に服従するを厭ひて絶対の自由境に至らんと志して却て物慾の奴隷となれる現代人の慘狀を、實に現代は凡ゆる權力の支配を逃れんとして全然無服従の生活に憧憬し、國家の權能より、道德の權能より、又神の權能より脱せんと焦燥せる時代である、併し乍ら斯くの如き努力は人をして、神よりも、道德よりも、國家よりも遙かに低き他の者に服従隷屬せしむる所以である、人は服従すべきものに服従して初めて自由獨立人たり得る、信仰の服従とは、壓制、威迫を含む事ではない、最も美はしき服従である、最も貴き服従である、花の如く麗に、月の如く優なるものである。

「異邦の萬民」の語が五節にあるのを受けて、第六節は「汝らも其人々の中に在りてイエスキリストの召を受けし者なり」と云ふ、羅馬の信者は第一に異邦の萬民の一部である、そして異邦の萬民はパウロが福音宣傳の使命の領域である、此意味に於て彼等が單に異邦人の一部であると云ふ事のみにも彼と彼等との間に離れがたき關係がある、然るに第二に彼等は「イエスキリストの召を受けし者」である、彼も亦一節に記せし通り召されし者である、共にキリストに召され、ともに父なる神を神とし主イエスキリストを主とする者である、されば彼と彼等との關係は二重に密接である、二者の間には離れんとして離れ難き關係が存するのである、誠に共にキリストに召されて人と人との交友は不易である、人と人と相繋がらずキリストに依て各自相つながら、間接の如くにして最も密接なる關係である、茲に凡ゆる差異區別を打破して立つ眞の交友が存するのである。

一節より六節に至る迂回路を取りて羅馬書の送り手は受け手と終に握手した、故に送り手は第七節の前半に於て「我れ凡てロマに在る所の神に愛いとこまれ召を蒙り聖徒と成れる者にまで書を贈る」と云ふたのである、單に「ロマに在る所の聖徒」と云はず「神に愛まれ召しを蒙り」を添加したる所にパウロ式の潤味がある、歡喜に溢れしパウロは斯く云はざるを得なかつたのである、先づ神に愛まるゝが第一、そして第二が召を蒙むることである、かくして初めて聖徒たり得るのである、神に愛まると云ひ召を蒙ると云ひ共に美はしき語である、此二句に接して羅馬の信者は感謝の懐かしき思出を以て其悔改當時を回想したことであらう——今日の我等も又然るが如く。

神に愛まれ召を蒙りて聖徒となつたのである、信者が信者自身聖徒と稱する時は俗人は之を驕慢として憎み且嘲る、曰く信者も亦罪を犯すにあらずやと、然り信者も又罪を犯す、即ち聖徒も亦決して聖くないのである、し

かし由來「聖徒」とは聖き徒即ち聖淨無疵の徒を意味する語ではない、原語聖書には *hagioi* (ハギオイス)とありて、*hagios* (ハギオス)より出でし語である、そして茲に注意すべきは此ハギオスと *oboloi* (ホシオス)との別である、ホシオスは事實上聖きを意味しハギオスは聖き事に用ひらるゝを意味す、ホシオスは一箇の汚れなきを示しハギオスは只神が聖き目的のために用ふるを示す、この二語は頗る似て而も大に異なるものである、そして聖徒はハギオスである、完全に聖き者ではない、聖き事のために用ひらるゝ者である、神の選別と聖召とを受けし者、世より選び出されて聖別せられし者である。

神殿に於て用ひらるゝ素焼の土器は器としては甚だ無價値のものである、しかしそれが神事に用ひらるゝが故に貴いのである、此意味に於てそれは聖器である、「われら此寶を土の器に藏れり」とパウロは云ふた、我等は眞に土の器である、價値なき、脆き、壞れ易き者である、しかし神に聖別せられて聖事に用ひらるゝ意味に於て聖徒である、故に我等の積罪垢汚せきざいこうごは我等の聖徒たるに於て何等の妨げをなさぬのである、否罪の増す所恩恵は彌増やふすのである、我等は斯く言ふて自己の罪を辨護せんとするのではない、罪を犯さざらんこと、聖きに至らんことは基督者の念々刻々の希望であるべきである、罪を犯して恥ぢざる者は基督者ではない、さはれ聖徒なる文字の意義は明確に了知して置かねばならぬ、此一事を知らざるため自己の罪多きに失望して效なき煩悶を重ね、曾て受けたる聖召を空無と感じ、失望の極信仰を喪失するに至る人が少なくない、摯實じじつなる魂の所有者に却て此危險がある、これ聖徒の意味を誤解せるより起ることである、聖徒即ち基督者は決して今聖淨無疵なるものではない、唯聖召を受け聖別せられて聖事に用ひらるゝ者たるに過ぎない、然らば基督者は何時までも聖くなり得ぬ者であ

らうか、否基督者は永久に聖くなり得ぬ者ではない、その切に願ふ所は全き聖潔であつて、其遂に到達する所は全き聖潔である、しかし是れ自己の力によつて到達するに非ず、遂に神に依て聖化され榮化さるゝのである、其時の歡喜^{べんぶ}拚舞果して如何なるべき、想ふだに心躍るは其時のことである、それ迄は基督者は「聖からざる聖徒」である、けれども疑ひもなく「聖徒」である。

以上一節より七節前半までに於てコリントよりロマまでの大アーチは愈よ^{いよいよ}出來したのである、アーチの渡されし距離は遠くして而も關係は頗る密である、共に神よりキリストを通して召されし者、共に恩恵を受けし者である、即ちパウロも彼等もキリストに在りて一なるものである、かくキリストに在りて一なる者の一人より他の者に書を贈るのであるとパウロは言ふ、見事にアーチの造られしかな、かくて此アーチを超えて甲は乙に祝福を送るのである、即ち七節後半に曰ふ、「汝等願くは我等の父なる神及び主イエスキリストより恩恵と平康を受けよ」と。

「恩恵」は五節の恩恵と同義に用ひられしものと思はる、神とキリストよりの凡ての賜を指すのである、その内容は基督者の實驗上熟知せる所である、「平康」は、英語 peace 原語に於て ειρηνη (アイレーネー) である、これ恩恵に接したる結果として起る一種言ひ難き微妙なる心の平安を云ふ、「神と和^{やはら}ぎしたために心に與へらるゝ深き靜謐又は内的安心の感」とゴオデーは之を説明して居る、その貴さは之を味へる者の熟知せる所である。

この恩恵と平康が「我等の父なる神及び主イエスキリストより」來るのである、神を「我等の父なる神」と呼びイエスを「主イエスキリスト」と呼ぶ、甲は父にして乙は主である、最も美はしく意味深き稱號である、恩恵

と平康が神とキリストとの兩者より來るのか、又は第五節の解義に於て説明せし如く神よりキリストを通して來るか、これ一の疑義であると思ふ、字義の上より見る時、英語の *from* に當る *quo* (アポー) なる前置詞が神とキリストとの兩者に係れる故を以て、二者を恩恵と平康の源泉と見る前説を採る人がある、併し此字義上の關係が神を源泉としキリストを仲介者とする事實を少し妨げぬと斷じて乙説に固執する人もある、孰れにせよ恩恵と平康が神とキリストとより來るとは實驗上の事實である、そして神のみを擧げなかつた處にパウロの特色が存するのである、神のみを擧ぐれば足ると云ふは近代人の理論たるに過ぎない、信仰の偉人使徒パウロは其實驗上より神とキリストとの兩者を擧げざるを得なかつた、そして近代の信者と雖も理論より靈的實驗を重んずる者は亦然るのである。

七節後半は原文の通りに譯せば「願くは我等の父なる神と主イエスキリストとより汝等に恩恵と平康あらん事を」となる、即ち是れ祈りの語である、兄弟に向つての祈りとして最も美はしきものであると云ふべきである、併し乍ら或は云ふ人があるであらう、書翰に於て「平安を祈る」と云ふ意味の語を記すは不信者も亦能くし得る處でないかと、答へて言ふ、不信者の祈りの語とパウロの此語との間には第一に意味上に大なる相違があり第二に實際に祈らぬと祈るとの相違があると、徒らに「平安を祈る」と書翰に記すも事實上祈らざるは不信者である、パウロの如き人は單に斯く記すに止まつた人ではない、必ずやロマの兄弟のためにその恩恵と平康とを數多度熱心あまたいびに祈つたに相違ない、かく思ふとき此語に一層の力を感知するのである。

然りパウロは世界の中心ロマ府を忘れ得る人ではなかつた、そして其處に住む所の少數の信者を忘れ得る人で

はなかつた、彼がコリントにありて此書を認めし前、小亜細亜の各地を廻りつゝありし時、彼は日に幾度となく心を西方に向けてカイザルの都ロマ府を想つたことであらう、そして其處の聖徒のために篤き祈りを神に献げた事であらう、彼は世界の中心に立つ彼等の基督者としての責任の大を痛切に思つたに相違ない、キリストの聖名の揚らんことを生涯の願とした彼が斯く思はぬ事は出来なかつたに相違ない、従つて彼等の信仰の堅立は單に彼等自身のためのみでなく、キリストの聖名のため、神の榮光のため、福音の世界に弘まらんため、全世界人類の救ひのために頗る必要なことであつた、されば神を思ひ、キリストを思ひ、福音を思ひ、世界人類を思ふパウロはロマの信徒のために切なる祈を献げざるを得なかつた、彼等の信仰の堅立を祈り、彼等の上に父なる神と主イエスキリストとより恩恵と平康の來らん事を祈らざるを得なかつたのである。

以上を以て自己紹介の部を終る、其中に幾つもの貴重なる眞理含まる、之を能く解せし人は福音其ものを了解せし人である、眞に是れ基督教の縮寫圖である、その一語一語に此世の他の處に於て見出し得ぬ特異なる眞理が存する。

第一章一節—七節の直譯

(1) パウロ イエスキリストの僕、召されし使徒 神の福音のために選別せられたる、(2) 此福音は 彼の預言者たちを通して 聖書に於て 従前より誓ひ給へるものにて (3) 彼の子に關するものなり、彼は肉によればダビデの裔より生れ (4) 聖き靈によれば 死者の復活を以て 能を以て 神の子として立てられし者 即ち我等の

主イエスキリストなり、主 (5) 彼を通して我等恩恵と使徒職を受く 凡ての異邦人に於ける信仰の服従にまで彼の名のために (6) 汝等も其人々の中において イエスキリストに召されしものなり、(7) ロマにある凡ての神々に愛せられ 召されて聖徒たる者にまで。汝等に思恵と平康あれかし

我等の父なる神及び主イエスキリストより。

右の意譯

(1) 我パウロ、イエス・キリストの奴隷たる點に於ては汝等と全く等しきもの、併し特に召されて使徒となりしもの、又神の福音ために前以て選別し置かれし者、(2) 此福音は今突然現はれしものにあらず、又我自身の創設にもあらず、神が舊約聖書に於て其出現を古くより其預言者たちの口を通して約束し給へるものにて、(3) 神の子に關係せる所のものなり、神の子とは誰か、肉によれば、ダビデ王統の裔として生れ、(4) 聖き靈によれば死者の中より復活せしために神の子なることが力強く表はれしもの (又は權能を以て神の子と立てられしもの) 即ち我等の主なるイエスキリストなり、(5) 此イエスキリストを通して我等は救に浴して各種の恩恵を受け、其上使徒職を受けたり、そは彼の名の揚がらんため異邦萬國の民をして信仰の服従(信仰によりて神に服従すること)に入らしめん爲なり、(6) 而して汝等は實に此異邦民中の一部にて、且我等同様イエスキリストに召されて信者となりしものなり、(7) (第一節を受けて) ロマ府に今住める所の神に愛せられ召されて聖徒となりし者にまで此書翰を送る。願くは我等の父なる神及び主イエスキリストより汝らに恩恵と平康と來らん事を。

第四節「聖書の靈性によれば甦りし事によりて明かに神の子たること顯れたり」とあるは全節悉く難解であること上述せし通りである、其中「甦りし事によりて」は原語には「死者（複數）の復活によりて」とある（*ἀναστρέψαι τούς νεκρούς*）、普通は之を「死者の中よりの復活」と見てキリストの復活を指すと解してゐる、これは事實を文字の中に読み込みしものである、文字上より云へば「キリストが死者を復活せしめ給ふ事によりて」と解する方が寧ろ自然であるかも知れない。

もしパウロの意味が茲にあつたとすれば、それは靈的死者を靈的に復活せしむること、即ち多くの者を新生命に入れる事を意味することとなる（靈的死者と明示はしてないが）、何となれば此場合は既往の事故未來に起る肉體の復活を指さない事は明かであるからである、然る時は第四節は人々を靈的に甦らしめる事を以てキリスト神性の證據となした事になるのである、もしパウロの眞意が茲にあつたとすれば彼は此場合餘にユニテリアン的ではないかとの批難が起るかも知れぬ。

しかし思ふべきはパウロの特性である、彼は一面教理家にして一面實驗家である、教理の主張の半面に必ず活ける靈的實驗が伴ふ、キリスト復活の主張は或意味に於て教理の主張である、しかし魂に於て死せる者の今の靈的復活は實驗である、今後者の起り得るは前者が事實なるがためである、主の復活は人々の靈的復活の原因である、後者は前者あるがために起り得るのである、この兩者は一本の糸の兩端である、故にキリスト神性の證據と

して後者を提出する時は、前者は自から其中に含まれ居ると見るべきである、故に人々を靈的に復活せしむる事によりてキリストの神の子たるが顯れたと云ふも少しも差支ないと思ふ、かく云ふてもキリストの復活が其神性の證據となつて居るのである。

三節、四節は、イエスを人として、また神の子として提示することを主眼としている。五節はこれを受けて「この方によって、私たちは恵みと使徒の務めを受けました」と記し、次にその理由として「御名のために、すべての異邦人の中に信仰の従順をもたらすためです」と記した。

「恵み」とは何を意味するかといえば、原語の *charis* (ハリス) は英語の *grace* にあたり、さまざまな意味を持つ言葉である。しかし、神またはキリストの恵みという場合は、「人に対しての自発的な、制限されない愛」を意味する(グリーンの文法書による)。そして五節の「恵み」は特に他の言葉で限定されていないため、広義に解釈すべきものである。マイヤーがこれを「全ての神の恵み」(the entire divine grace)と解釈したのは、まことに適切である。すなわち、救いに与かり、罪を赦され、いのちに浴し、喜びと平安を味わい、永遠の希望を与えられるに至った一切を指す。一言で言えば「救いの恵み」(ゴデー)とすることも可能である。それがどのようなものであるかは、しばしば涙をもってこの事を感謝したすべてのキリスト者の知るところである。

まず一般的なことを記し、次に特殊なことに移るのは、パウロが慣用する筆法である。主から恵みを受けた点において、筆者であるパウロも読者であるローマの信徒も全く同一である。彼はこの両者の共通点を挙げて、まず温かさを読者に注いだ後で、「使徒の職を受ける」と自己の特異点に触れている。自己の権能を記す前に、まず読者と同列に自分を置くのは、「イエス・キリストのしもべ、召された使徒」と一節に記したのと同様である。

「この方によって、私たちは恵みと使徒の務めを受けました」と言う。「この方によって」はキリストである。さらに正確に言えば、キリストを通してである（原語の *διὰ* は英語の *through* にあたる）。付与者は神であり、仲介者はキリストである。全ての恵みは神からキリストを通して降るのである。これは聖書の教えるところであり、また体験上の真理である。近代の信徒は、自分たちは仲介者によって神との関係を間接にされるのを嫌い、人は各自直接にその神につながり得るべきであり、人は皆神の子であり神は全ての人の父である、父子の関係は直接であるべきである、と言う。まことにもっともらしい説であるが、事実が雄弁にこの事を否定することをどう受け止めるべきか。それは、キリストを除いて神と人との関係を近づけようとするのは、かえってそれを遠ざける道だからである。人はキリストなくして神とつながろうとしても、事実上つながり得ない。キリストを間に置いて初めて人は神と結び得るのである。これが心靈上の体験的眞実である。あたかも山頂を極めるには登山路を登らなければならないように、電気は電線を通して初めて電灯を灯し得るようになる。キリストを間に置いて初めて恵みは彼を通して私たちに下る。これこそ眞にいのちを得る道である。古来、敬虔で力ある信徒はことごとくこの道によったことを歴史で見るとすべきである。重ねて言うが、私たちは理論によらず事実によ拠するのである。

五節の後半は五節前半の理由である。「御名のために、すべての異邦人の中に信仰の従順をもたらすためです」と言う。これを改めて「それは、彼の御名のために、異邦の万民を信仰の服従に入らせるためである」とする方が原意に近い。

「御名のために」、すなわちキリストの名のためと言う。なぜ「万民を救うために」と言わないのか。人類に對する福音宣教は人類それ自身の救いのためではないのか、イエス自身も全人類のために十字架の死さえ受けたではないか、なぜパウロは万民のためと言わずして、キリストの名のためと言ったのか。これはいかにも近代人の出しそうな抗議である。そうは言っても、パウロの心を常に最も強く占領していたのは世界万民ではなく、キリスト彼自身であった。したがって、彼の福音宣教は彼の名のため、彼の聖名が揚がるためであった。もちろん万民を思わなかったのではない。牧者なき迷える羊の痛ましい姿は、鋭敏な彼の心を強く動かしたに違いない。しかしながら、この痛ましい姿よりも、彼の聖なる姿がより鮮やかに彼の心に映ったのである。まずキリストのため、然る後に同胞人類のためである。これこそ、主にある健全な心の態度である。パウロの言葉は常に意外に出るように見えて、実は決して意外に出ないのである。

「すべての異邦人の中に」とあるのは、パウロが異邦人伝道の使命を受けた使徒であるからである。「信仰の従順をもたらすためです」とあるのは、原文の「信仰の服従にまで」という言葉を補って訳したものである。今や服従という言葉は人の忌み嫌うものである。そうはいっても、私たちの体験は、信仰の服従のみが人を自由独立にさせることを教える。人は、信仰をもって神に服従して初めて自主の民となり得るのである。この服従を退ける者は、何か他の空しい人や力に服従してその奴隷となるのを余儀なくされる。見よ、服従すべき者に服従するのを嫌い、絶対の自由境に至ろうと志して、かえって物欲の奴隷となっている現代人の悲惨な状況を。実に現代

は、あらゆる権力の支配を逃れようとして、全く無服従の生活にあこがれ、国家の権能より、道德の権能より、また神の権能より脱しようと焦燥している時代である。しかしながら、このような努力は、人を、神よりも、道德よりも、国家よりも遙かに低い他の者に服従隷属させる結果となる。人は服従すべきものに服従して初めて自由独立人たり得るのである。信仰の服従とは、压制、威迫を含むことではない。最も美しい服従であり、最も尊い服従である。花のように麗しく、月のように優美なものである。

「すべての異邦人」の語が五節にあるのを受けて、六節は「その異邦人たちの中にあつて、あなたがたも召されてイエス・キリストのものとなりました」と言う。ローマの信徒は、第一にすべての異邦人の一部である。そしてすべての異邦人はパウロが福音宣教の使命とする領域である。この意味において、彼らが単に異邦人の一部であるという事のみでも、彼と彼らとの間に離れがたい関係がある。然るに、第二に彼らは「召されてイエス・キリストのものとな」った者である。彼もまた一節に記した通り召された者である。共にキリストに召され、ともに父なる神を神とし、主イエス・キリストを主とする者である。それゆえ、彼と彼らとの関係は二重に密接である。両者の間には離れようとしても離れがたい関係が存在する。まことに、共にキリストに召されて人と人との友愛は不変である。人と人とが相つながるのではなく、キリストによって各自が相つながるのである。間接のように見えて最も密接な関係である。ここにあらゆる差異や区別を打ち破って成り立つ眞の友愛が存在する。

一節から六節に至る迂回路をたどり、羅馬書の送り手は受け手とついに握手した。ゆえに、送り手は七節の前半で「ローマにいるすべての、神に愛され、召された聖徒たちへ」と言ったのである。単に「ローマにいる聖徒」

と言わず「神に愛され、召された」と付け加えたところに、パウロ式の潤いがある。喜びに溢れたパウロは、このように言わざるを得なかったのである。まず神に愛されるのが第一、そして第二が召しを受けることである。こうして初めて聖徒たり得るのである。神に愛されると言い、召しを受けると言い、ともに美しい言葉である。この二句に接して、ローマの信徒は感謝の懐かしい思い出をもって、その悔い改めの当時を回想したことであろう——今日の私たちもまたそうであるように。

神に愛され、召しを受けて聖徒となったのである。信徒が自分自身を聖徒と称するとき、俗人はこれを傲慢として憎み、かつ嘲る。いわく、信徒もまた罪を犯すのではないかと。然り、信徒もまた罪を犯す。すなわち、聖徒もまた決して聖くないのである。しかしながら、元来「聖徒」とは聖い者、すなわち聖潔で傷のない者を意味する言葉ではない。原語聖書には *hagios* (ハギオイス) とあり、*hagos* (ハギオス) から出た言葉である。そしてここに注意すべきは、このハギオスと *hosios* (ホシオス) との区別である。ホシオスは事実上聖いことを意味し、ハギオスは聖いことに用いられることを意味する。ホシオスは一点の汚れがないことを示し、ハギオスはただ神が聖い目的のために用いることを示す。この二語は大変似ているけれども大いに異なるのである。そして聖徒はハギオスである。完全に聖い者ではない。聖いことのために用いられる者である。神の選別と聖なる召しとを受けた者、世から選び出されて聖別された者なのである。

神殿において用いられる素焼きの土器は、器としては甚だ無価値なものである。しかしそれが神のことに用いられるがゆえに尊いのである。「私たちは、この宝を土の器の中に入れていきます」(コリント人への手紙第二 四章

七節)とパウロは言った。私たちは真に土の器である。価値のない、脆い、壊れやすい者である。しかし神に聖別されて聖いことに用いられるという意味において聖徒である。ゆえに、私たちの積み重ねた罪や汚れは、私たちの聖徒であることにおいて何の妨げもなさないのである。否、罪の増すところで恵みはますます増すのである。私たちはこのように言って自己の罪を弁護しようとするのではない。罪を犯さないこと、聖いに至ることは、キリスト者の念々刻々の希望であるべきである。罪を犯して恥じない者はキリスト者ではないのである。そうはいっても、聖徒という文字の意義は明確に理解しておかなければならない。この一事を知らないため、自己の罪多きに失望して無益な煩悶を重ね、かつて受けた聖なる召しを空無と感じ、失望の極みに信仰を喪失するに至る人が少なくない。誠実な魂の持ち主にかえってこの危険がある。これは聖徒の意味を誤解したことから起こることである。聖徒、すなわちキリスト者は、決して今聖潔で傷のない者ではない。ただ聖なる召しを受け、聖別されて聖いことに用いられる者に過ぎない。それではキリスト者はいつまでも聖くはなり得ない者なのであるか。否、キリスト者は永久に聖くなり得ない者ではない。その切に願うところは全くの聖潔であって、その遂に到達するところは全くの聖潔である。しかし、これは自己の力によって到達するのではなく、ついに神によって聖化され、栄光化されるのである。その時の喜び踊りは果たしてどのようなものであろうか。思うだけでも心が躍るのはその時のことである。それまではキリスト者は「聖くはない聖徒」である。けれども疑いもなく「聖徒」なのである。

以上、一節から七節前半に至るまで、コリントからローマまでの大きなアーチがついに出来上がったのであ

る。アーチが渡された距離は遠いけれども、関係は非常に密接である。共に神からキリストを通して召された者、共に恵みを受けた者である。すなわち、パウロも彼らもキリストにあって一つなるものである。こうしてキリストにあって一つなる者の一人から他の者に書を送るのであるとパウロは言う。見事にアーチが造られたものである。こうしてこのアーチを超えて、甲は乙に祝福を送るのである。すなわち七節の後半に言う、「私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたにたにありますように」と。

「恵み」は五節の「恵み」と同義に用いられたものと思われる。神とキリストからのすべての賜物を指すのである。その内容はキリスト者の体験上熟知しているところである。「平安」は英語の *Peace*、原語においては *eirenē* (アイレーネー) である。これは恵みに接した結果として起こる、一種言い難い微妙な心の平安を言う。「神と和解したために心に与えられる、深い静けさまたは内的な安心の感覚」とゴッダーはこれを説明している。その尊さは、これを味わった者の熟知しているところである。

この恵みと平安が「私たちの父なる神および主イエス・キリストから」来るのである。神を「私たちの父なる神」と呼び、イエスを「主イエス・キリスト」と呼ぶ。甲は父であり、乙は主である。最も美しく意味深き称号である。恵みと平安が神とキリストの両者から来るのか、または五節の解釈において説明したように神からキリストを通して来るのか、これは一つの疑問であると考ええる。字義の上から見ると、英語の *from* にあたる *homo* (アポール) という前置詞が神とキリストの両者にかかっているゆえに、二者を恵みと平安の源泉と見る前説を採用する人がいる。しかし、この字義上の関係が神を源泉としキリストを仲介者とする事実を少しも妨げないと断じて

乙説に固執する人もいる。いずれにせよ、恵みと平安が神とキリストとから来ることは体験上の事実である。そして神のみを挙げなかつたところにパウロの特色が存在する。神のみを挙げれば足りるというのは、近代人の理論に過ぎない。信仰の偉人使徒パウロは、その体験より神とキリストの両者を挙げざるを得なかつたのである。そして近代の信徒といえども、理論より靈的体験を重んじる者はまたそうなっている。

七節後半は、原文の通りに訳せば「願わくは、私たちの父なる神と主イエス・キリストとから、あなたがたに恵みと平安とがあるように」となる。すなわち、これは祈りの言葉である。兄弟に向かつての祈りとして最も美しいものと言うべきである。しかしながら、あるいは言う人がいるであろう。書簡において「平安を祈る」という意味の語を記すのは、不信者もまたでき得るところではないかと。答えて言う。不信者の祈りの語とパウロのこの語との間には、第一に意味上に大きな相違があり、第二に実際に祈るか祈らないかの相違があると。いたずらに「平安を祈る」と書簡に記しても、事実上祈らないのは不信者である。パウロのような人は、単にこのように記すにとどまつた人ではない。必ずやローマの兄弟のためにその恵みと平安とを幾度も熱心に祈つたに違いない。このように思うとき、この言葉に一層の力を感じるのである。

然り、パウロは世界の中心ローマを忘れ得る人ではなかつた。そしてそこに住む少数の信徒を忘れ得る人ではなかつた。彼がコリントにあり、この書を認める前、小アジアの各地を回っている時、彼は一日に何度となく心を西方に向けてカエサル之都ローマを思ったことであろう。そしてその聖徒のために篤い祈りを神に捧げたことであろう。彼は世界の中心に立つ彼らのキリスト者としての責任の大きさを痛切に思ったに違いない。キリス

トの聖名が揚がることを生涯の願いとした彼が、このように思わないことはできなかったに違いない。したがって、彼らの信仰が堅く立つことは、単に彼ら自身のためだけでなく、キリストの聖名のため、神の栄光のため、福音の世界に広まるため、全世界人類の救いのために非常に必要なことであった。それゆえ、神を思い、キリストを思い、福音を思い、世界人類を思うパウロは、ローマの信徒のために切なる祈りを捧げざるを得なかった。彼らの信仰が堅く立つことを祈り、彼らの上に父なる神と主イエス・キリストとから恵みと平安とが来ることを祈らざるを得なかったのである。

以上をもって自己紹介の部を終える。その中にはいくつもの貴重な真理が含まれる。これをよく解した人は福音そのものを了解した人である。真にこれこそキリスト教の縮写図である。その一語一語に、この世の他のところでは見出し得ない特異なる真理が存在するのである。

第一章一節―七節の直訳

- (1) パウロは、イエス・キリストのしもべであり、召された使徒であり、神の福音のために選ばれた者である。
- (2) この福音は、彼の預言者たちを通して聖書において以前から約束されていたものである。
- (3) それは彼の子に関わるものである。彼は肉によればダビデの子孫から生まれた。
- (4) 聖なる霊によれば、死者の復活をもって力をもって神の子として立てられた者、すなわち私たちの主イエス・キリストである。
- (5) 主である彼を通して私たちは恵みと使徒の職とを受けている。すべての異邦人における信仰の服従に至るまで、彼の名のために。
- (6) あ

あなたがたもその人々の中にいて、イエス・キリストに召された者である。(7) ローマにいるすべての、神に愛され、召されて聖徒となった者たちにまで。あなたがたに恵みと平安とがあるように。私たちの父なる神および主イエス・キリストから。

右の意訳

(1) 私パウロは、イエス・キリストの奴隷である点においてはあなたがたと全く等しい者であるが、しかし特に召されて使徒となった者であり、また神の福音のためにあらかじめ選び分けられていた者である。(2) この福音は、今突然現れたものではなく、また私自身の創設でもなく、神が旧約聖書においてその出現を古くからその預言者たちの口を通して約束されたものである。(3) 神の子に関係するところのものである。神の子とは誰か。肉によれば、ダビデ王統の子孫として生まれ、(4) 聖なる霊によれば、死者の中から復活したことによって、神の子であることが力強く表された者、すなわち私たちの主なるイエス・キリストである。(5) このイエス・キリストを通して私たちは救いにあずかって様々な恵みを受け、その上使徒の職をも受けた。それは彼の名が揚がるために、異邦万国の民を信仰の服従に入らせるためである。(6) そしてあなたがたは実にこの異邦民の一部であり、しかも私たちと同様にイエス・キリストに召されて信徒となった者である。(7) (一節を受けて) ローマに今住んでいるところの、神に愛され、召されて聖徒となった者たちにまでこの書簡を送る。願わくは私たちの父なる神および主イエス・キリストからあなたがたに恵みと平安とが来ることを。

附言

四節「聖書の靈性によれば蘇ったことによつて明らかに神の子であることが現れた」とあるのは、全節すべて難解であることは上述の通りである。そのうち「蘇ったことによつて」は原語には「死者（複数）の復活によつて」とある(ἐξ ἀναστάντων νεκρῶν)。普通はこれを「死者の中からの復活」と見てキリストの復活を指すと解釈しているが、これは事実を文字の中に読み込んだものである。文字上から言えば「キリストが死者を復活させられることによつて」と解釈する方がむしろ自然かもしれない。

もしパウロの意味がここにあつたとすれば、それは靈的死者を靈的に復活させること、すなわち多くの者を新しいのちに入れることを意味することになる。なぜならこの場合は既往の事であるから、未来に起こる肉体の復活を指さないことは明らかであるからである。そうであれば四節は、人々を靈的に蘇らせることをもつてキリストの神性の証拠としたことになる。もしパウロの真意がここにあつたとすれば、彼はこの場合あまりにユニテリアン的ではないかとの非難が起こるかもしれない。

しかし、考えるべきはパウロの特性である。彼は一面は教理家にして一面は実験家である。教理の主張の半面に必ず生きた靈的体験が伴う。キリスト復活の主張はある意味において教理の主張であるが、しかし魂において死んでいる者の今の靈的復活は実験である。後者の起こり得るのは前者が事実であるためである。主の復活は人々

の靈的復活の原因であり、後者は前者があるために起り得るのである。この両者は一本の糸の両端である。ゆえにキリスト神性の証拠として後者を提出するときは、前者は自ずからその中に含まれていると見るべきである。ゆえに人々を靈的に復活させることによってキリストの神の子たるが示されたと言っても少しも差し支えないと考える。このように言ってもキリストの復活がその神性の証拠となっているのである。